

## 「日本行動計量学会 35 周年に寄せて」

東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻 藤井 聡

日本行動計量学会は、筆者が土木計画、交通計画で研究をはじめ、はじめて土木以外の分野の方々と接触を持つ機会をもてた最初の学会である。最初に日本行動計量学会に参加したのは、学位論文をまとめる前のことであった。筆者の学位論文は、アクティビティ分析、交通行動分析と呼ばれる研究分野で、交通計画を立てる折の基礎情報となる、「交通需要」を予測するために、一人一人の都市生活者の時空間内での行動軌跡を統計的に予測する技術を開発することを目的としたものであった。すなわち、筆者の当時の仕事は、文字通り、「行動計量」のモデルを開発することだったのである。

その中で、様々な分野の研究者にお目にかかることができた。統計学の先生方や、数理心理学の先生方、そして、意思決定に関わる心理学を研究しておられる先生方であった。言うまでもなく、分野が異なれば、研究の「目的」は大いに異なっている。上述の様に、当時の筆者は、「行動を予測する」ということを目的とした諸研究を行っていた一方で、心理学や統計学、数理心理学は、必ずしも「予測」を目的とするものではない。しかし、目的は異なっても、研究の対象は「人間の行動」であり、そのためのアプローチとして「行動を測定したデータ」を分析するのであり、そして、その分析の方法として「統計学」を用いているという点では、大いに重なりあっていたのである。そうした点から、行動計量学会の場に参加することは、筆者にとって大いに刺激となったのである。

とはいえ、やはり、目的が異なれば、「共同研究」を進めるというようなことは難しい。それ故、当時は、行動計量学会は「勉強」の場ではあっても、「議論」や「共同研究」の場ではなかった。筆者にとって、行動計量学会が議論や共同研究の場となったのは、やはり、研究目的を一にする共同研究者と一緒する機会に恵まれたからである。学位を取る以前は「行動の予測」にのみ関心を抱いた研究を進めていた筆者であったが、学位取得後「行動の理解」に重点を置いた研究を進めようとしていた、そうした中で、行動計量学会に共に属していた竹村和久先生（当時筑波大学、現在早稲田大学教授）と研究をご一緒する機会に恵まれ、それ以降、行動計量学会が共同研究の場、となったのである。それ以来、「状況依存的焦点モデル」に関する研究をはじめとした、認知的で、統計的で、かつ、行動的な意思決定の共同研究をご一緒させていただく一方、社会的な要素や価値論的な要素も加味した多様な分野の研究者と一緒する機会に恵まれるに至っている。こうした経緯を振り返るに、行動計量学会の場が、筆者の現在の研究生活の展開において極めて重要な位置を占めていたものと改めて感じ入る次第である。